

I. 『源氏物語』の作者 紫式部

* ◇内の数字は資料番号

まず、『源氏物語』の作者紫式部を描いたものを掲げました。

紫式部絵は、石山寺にまつわる伝説、物語の執筆を拜命した紫式部が石山寺に参籠し、琵琶湖に映る中秋の名月を眺め、その光景から靈感を得て、須磨巻の「今宵は十五夜なりけり」から執筆したという伝承に基づく絵柄が中心を占めます(『菊寿百人一首撰文庫』^{◇1}『和歌百人一首』^{◇2}『女教草大和錦』^{◇3})。中には、紫式部の画像ばかりでなく、伝説の概略を付したもの(『万玉百人一首』^{◇8})や『源氏物語』の成立と意義を記したもの(『操百人一首華文庫』^{◇14}『花鳥百人一首』^{◇6})などもあります。

石山寺から琵琶湖を眺めやる紫式部の姿は、中国の瀟湘八景に倣った「近江八景」と結び付いて、その光景を取り入れて描かれました。ちなみに、近江八景は、石山秋月、三井晚鐘、瀬田夕照、粟津晴嵐、唐崎夜雨、比良暮雪、堅田落雁、矢橋帰帆で、それぞれに和歌が詠まれ、近江八景歌が詠まれるようになります。紫式部絵は、その中から「石山秋月」の「石山や鳩の海照る月影は明石も須磨もほかならぬかは」が記されたりします(『源氏物語絵尽大意抄』^{◇4}『湖月百人一首操庫』^{◇5}『百人一首(仮称)』^{◇7})。また、紫式部の朋友の少将が亡くなった後に、同僚の女房と詠み交わした歌「誰か世に長らえて見む書き留めし跡は消えせぬ形見なりとも」(紫式部集、新古今集・哀傷)が添えられたものもあります(『和歌百人一首』^{◇2})。

紫式部は「女八大家」(『女撰要和国織』^{◇10}『女教千載小倉葉』^{◇11})、「本朝名女」(『女有職萃文庫』^{◇13})の一人に数えられていて、その呼称の由来や伝記が語られ、また、「水鳥を水の上とやよそに見ん我も浮きたる世を過しつづ」(『女訓百人一首錦鑑』^{◇9})の名歌なども見られます。「倭国賢女」(『女教万宝全書東鏡』^{◇12})はやや特異で、ある殿上人がかいま見した、後の宮の女房たちの蜚についての優雅な会話を紹介していきまして、清少納言、紫式部、赤染衛門、伊勢大輔、和泉式部、馬内侍の名が挙げられています。

(東京学芸大学名誉教授 小町谷照彦)

近世庶民教育資料から見た

源氏物語

双六・往来物を中心に